近世初期医事文化と庶民文学との接点をめぐって

花田富二夫

日本の近世初期は、曲直瀬道三などの活躍により、いわゆる中国新医学が導入され、人々に広く公開されていった時代でもあった。その間、文学方面では、仮名草子と呼ばれる庶民のための種々の読み物が刊行された。それらの内容には類型的な話も多い。そこで、先年『仮名草子話型分類索引』を編述し、種々の話型を採集した。その中に医学的素材も多く見られることに着目し、「生活・文化」の分野に、「医学」の項目を設け、約130の見出し語のもと、「医学」的説話の収集を試みた。このことは、医事文化と庶民文学との接点を示すものであり、当期の医事文化と文学との関係、あるいは作者や医学書の流通という問題を考える上で重要な示唆を与えるものである。そこで、当発表では、まず、どのような内容が、どの程度存しているのか、前述編著書を増補する形で表示し、提示した。もちろん、これでもまだ不十分であり、採録の対象としたのは代表的な作品に過ぎないが、おおよその内容を知ることができよう。さて、浅井了意作『伽婢子』は、周知のごとく、中国・朝鮮古小説の翻案小説である。この作品にも、表示のごとく数話の医学的説話が登載されている。しかし、これらの医学的素材は、鎌倉後期に成立した我が国の『医談抄』や中国南宋の『医説』にも記載されており、医学説話の代表的なものであったとも考えられる。したがって、当説話は了意のころ、さほど目新しいものでもなく、早くから巷間に上っていたものであったろう。では、どこで了意は接したのか、今、この疑問に答えることはできないが、この接点こそ、両者の背景を考える上で究明されねばならない問題でもある。なぜなら、それは『伽婢子』のみにとどまらず、なぜ、このように多くの医学的素材が仮名草子に採られるに至ったのかという疑問とも重なるからである。この点に関し、医事文化と文学行為との接点としては、「お伽衆」の存在から論じる必要がある。桑田忠親氏著『大名とお伽衆』に指摘されるお伽衆には、医学関係者がじつに多いことが分かる。今回は、これらにつながる作品として、『あだ物語』と『木斎咄評判』について考えてみた。前者は紀州藩家老三浦為春の著作であり、後者は、成立時期は仮名草子時代より後になるが、やはり、紀州藩につとめた医師、板坂木斎がそのモデルと私考されるからである。 木斎は紀州藩の薬草選定にも従事し、対馬藩との交易にあたっていたことが指摘されている。ただ、資料不足はいかんともしがたく、さらなる調査が求められる。さらに、表示のうちには、「薬種・妙薬」の項目も多い。これは、まさしく庶民のためのものであったろう。やがて、これらが、水戸藩での『救民妙薬』の出版にもつながると考えられる。お伽衆は大名級のお側役であったが、妙薬医者こそ庶民のためのものであった。とするならば、仮名草子は、まさしく、その庶民のための妙薬講

釈の場であったともいえるのではないだろうか。『犬枕』の作者と目される秦宗巴は、『徒然草』の注釈書も著述し、医師と徒然草講釈との関連も指摘されている。仮名草子と医学的素材との聞には、このように文学・医学兼学の文化的土壌が存していたのであり、その背景こそ、仮名草子に医学的素材が採り入れられていった源流であったと推考したい。本発表はこの点で従来の仮名草子の意義に新見解を提示するものである。なお、本発表の一部は「文学」（平成19年5・6月号、岩波書店）「仮名草子と医学との接点―その「場」を中心に―」に発表しているので参照願いたい。